

2019年ワールドカップファイナル。

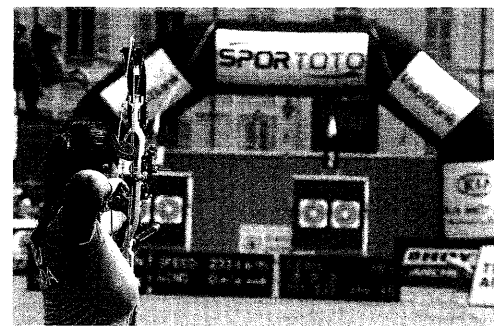
これにより、世界中に広がっていたコンパウンドに対する抵抗は解消された。しかし、アウトドア（ターゲット競技）へのコンパウンド加入には時間を要した。コンパウンドが初めて世界ターゲット選手権に加わったのは、1995年にインドネシアのジャカルタで開催された第38回大会だった。



コンパウンド部門が初めて行われた1995年世界選手権大会。



「ヒット/ミス」ラウンドで行われた2010年ワールドカップ。



2011年には50m、80cm的、6リングで得点制で行われた。

【特別寄稿】

転換期を迎えたCP

コンパウンド部門オリンピック正式種目認可の可能性

ジョージ・テクミチョフ（国際アーチェリーコンサルタント）

東京オリンピックが開幕する7月24日、アーチェリー競技がスタートする。1試合1試合、熱戦が期待されるが、8年後の2028年ロサンゼルス・オリンピックで、コンパウンド部門の開催が噂される。その可能性はどれだけあるのか？ 2012年ロンドン・オリンピックまで実況アナウンサーを務めたジョージ・テクミチョフに語ってもらった。

コンパウンド初の世界選手権 1991年インドア大会

コンパウンドボウが生まれたのが1960年代後半。以来、急激に広まっていった画期的な弓具である。ボウハンティングやアメリカのレクリエーションアーチェリーで比較的すぐに受け入れられた。

しかし、ターゲットアーチェリーというスポーツで、コンパウンドが世界で認められるまで20年を越える年月を要した。コンパウンドのターゲット競技が確立されるまで20年。そしていま、その歴史は29年になる。現在、ひとつの例外を除いて、コンパウンドは世界中の多くの試合で受け入れられている。その例外とはオリンピックだ。

コンパウンドの国際大会加入に対しては、世界中で抵抗があった。しかし、FITA（国際アーチェリー連盟。現在のWA）世界アーチェリー連盟のジム・イーストン会長が努力を重ねた結果、国際大会でのコンパウンド部門が認められた。その最初の試合が、1991年にフィンランドのオウルで開催された第1回世界インドア選手権である。

国際大会にコンパウンド部門が加わってわかったことは、アメリカの圧倒的な強さである。

アメリカのアーチャーは、アメリカ国内の試合ですでに数十年にわたってコンパウンドを使用し、コンパウンドの実力もコンパウンドに対する理解度も、他の国の選手に比べてケタ違い。一方、アメリカ以外の国では、コンパウンドアーチャーは少なく、実力も比較的低いものであった。そのため、コンパウンドが加わった当初の大会は、アメリカがコンパウンド部門のメダルを独占することが多かった。

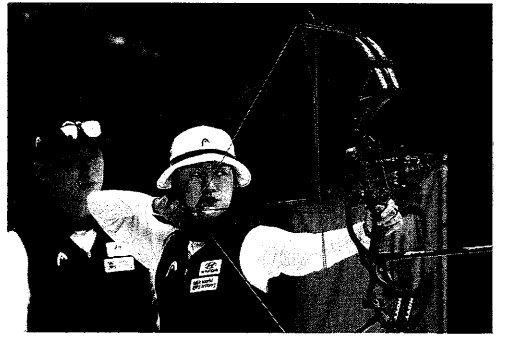
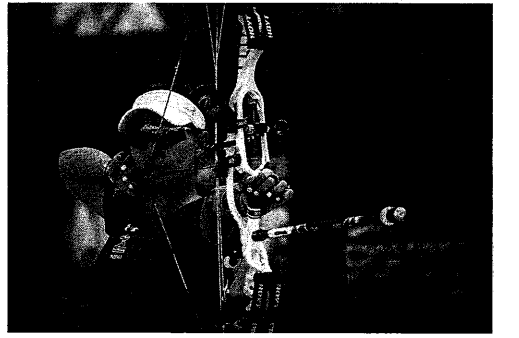
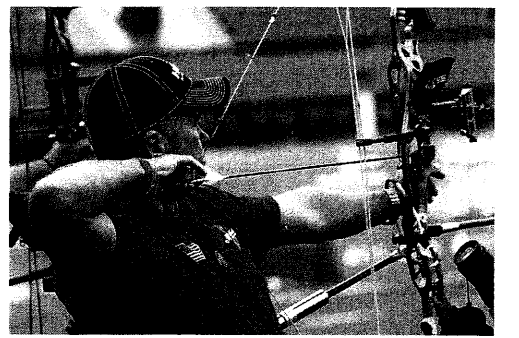
リカーブだけでなく、コンパウンドも試合形式はたびたび変更された。コンパウンドが初登場した1995年世界ターゲット選手権のときは、リカーブ同様、4距離のFITAラウンド（男子90・70・50・30m、女子は70・60・50・30m）で予選を行い、70mの決勝ラウンドを行った。10年以上前、WAはコンパウンドのオリンピック正式種目認可を模索していたこともあり、リカーブと異なる、リカーブと区別化する競技ラウンドを作ることが

決定した。この区別化の必要性は、国際オリンピック委員会（IOC）の「ラウンドがリカーブと異なる場合にのみ、オリンピックにコンパウンド部門を加えることを検討する」という通達によって推進された。

WAは、IOCの承認を得るために、トップ選手、役員、その他のエキスパートで構成される特別委員会を設立。リカーブと大きく異なるラウンドを作成し、トップレベルのコンパウンド競技に必要な正確性と精神面の強さがわかりやすくなる試合を考案した。

委員会は主にコンパウンドのトップアーチャーによって推進され、彼らが「良い解決策」と思ったものに到達した。距離は50m。的は、中心に直径10cmの黄色い「ヒットゾーン」のある小さい的だ。そのヒットゾーンに当たったか外れたかを競う、いわゆる「ヒット/ミス」で、このラウンドの最初の試合は2010年に開催された。このラウンドの背景にある考えのひとつは、距離を短くすると会場を見つけやすくなること。そして、「ヒット/ミス」は動きが速く、興味深く、観





[上から] レオ・ワイルド、サラ・ロベスブレイデン・ギャレンティン、リンダ・オチョア・アンダーソン、アジア大会優勝者のソ・チェオン(韓国)。ワイルドの写真は、世界記録を達成したときのもの、ソ・チェオンの写真は2019年世界選手権大会のときのもの。

客やメディアも理解しやすいと考えられていた。

ところが、それは残念ながら、思うようにはいかなかった。たとえば、的中心にあるXに当たった矢と、ラインにかろうじて触れた矢が同じポイントで、正確なシューティングに対する報酬がばやけてしまった。観客はその試合をあまり好んでいないことはすぐにわかった。観客は高スコアや接戦のある戦いを高く評価していたが、「勝ち負け」だけの「ヒット/ミス」ラウンドはそうはいかなかった。「ヒット/ミス」ラウンドは、スコア自体あまり魅力的なものではなく、さらにトップアーチャーが即座にターゲットパニックに陥るなどの問題も現れた。

そういう事態に対しWAは迅速に対応し、数シーズン後「ヒット/ミス」ラウンドは廃止された。そして、生まれたのが現在のラウンドである。距離は「ヒット/ミス」ラウンド同様50mだが、的は6リング、Xリング付きの80cm。そして、72射の予選ラウンドと15射による1対1の決勝ラウンド、トーナメント戦である。

2011年世界選手権から、コンパウンドは予選ラウンド、決勝ラウンドともに50mに変更された。このラウンドはシューティング精度を競い、観客に感動を与えるハイスコアの戦いになった。また、射つ距離が短いため、試合会場を見つけないという利点は維持された。

しかし、これも一部のアーチャーに嫌われた。「近すぎる」「挑戦意欲がわかない」「パフォーマンスが簡単に出る」……。トップアーチャーの間では、いままもそういった批判の声がある。

ところが、コンパウンドの決勝ラウンド(50m15射)はこれまで10年ほど実行されているが、だれひとりとして真のパフォーマンス(15X)を射った選手はいない。しかも、風の強い天候では、このラウンドはさらに難しくなる。2015年にレオ・ワイルド(アメリカ)が15射マッチの世界記録(イーストンX10シャフトを使用)を樹立。150点/12Xである。ブレイデン・ギャレンティン(アメリカ)は、50mラウンド(72射)で718点(70点満点)の世界記録を達成。女子の現在の世界記録は、

50mラウンドがサラ・ロベス(コロンビア)の713点であり、15射マッチがリンダ・オチョア・アンダーソン(国籍は以前メキシコ、現在アメリカ)の150点/11Xである(これらの記録はすべて、X10およびX10プロツアーで樹立された)。

現在、WAではIOCが提示した必要条件(リカーブとの区別化、観客へのアピール、追加コストの削減、現在のラウンドに対するトップ選手の苦情等への対処……)を満たすことで、オリンピックで受け入れられる新コンパウンドラウンドの完成に向けて活動している。それは、2028年ロサンゼルス・オリンピックの新追加種目として、コンパウンドが受け入れられる可能性があるためだ。

2028年ロス・オリンピックはコンパウンド正式種目認可のチャンス

その扉は、パンアメリカン大会、ヨーロッパ大会、アジア大会など、さまざまな大陸レベルの競技大会でのコンパウンド部門の採用によって開かれた。

説明する。

「それは私たちの決定事項ではない。IOCと共に、IOCの決定事項を明確にしたいと思う。オリンピックの理念に適合しない場合、コンパウンドが追加されるチャンスはない。それはまた、オリンピックの大会期間中に可能な限り最善の方法で会場を再利用すること、そしてオリンピック開催のための予算内で実施されることを意味している」

コンパウンドがオリンピックへの扉を開き、スポーツの平等性を一般的に高めるために、これから2年間、多くの作業が必要になる。そして、リカーブ同様、現在のラウンドに将来変更が加えられる可能性もある。

まず最初に議論されるテーマは、各種ラウンドでの標的(ターゲットフェイズ)と、それに対する選手のシューティング精度であり、それはコーチ委員会やこの問題に精通した統計学者によって検討される。実際、この会では、リカーブの標的の調整も検討されている。この取り組みの目標は、2021年WA総会での推薦だ。したがって、

また、ワールドゲームズではコンパウンド競技が重視され、強調されている。良い例がアジアである。アジア大会でコンパウンドが正式に採用される前に、アジア全体のコンパウンドのレベルが急上昇した。オリンピックと各大陸大会は政府や企業の支援を受ける唯一のイベントだ(アメリカはオリンピックや世界大会の政府支援を受けていない数少ない国のひとつである)。

コンパウンドが大陸大会で認可され実施されると、コンパウンドの発展とともに政府や企業の支援が続くようになった。それにより、韓国、台湾、インドなどが世界トップクラスのコンパウンドアーチャーを育てることに繋がった。

しかし、コンパウンドのオリンピック加入が認められる可能性を現実のものにするためには、まだ対処しなければならない課題も多い。

第一に、女子選手の少なさである。これは、おそらく最も深刻な問題だ。コンパウンド部門に参加している女子選手の数は、男子選手に比べて圧倒的に少なく、IOCでは「改善が必要な

事項」として特定されている。IOCは重要な目標として性別の男女平等を掲げており、これに関してはまだ大きな改善の余地が残されている。

リカーブアーチャーは性別参加率がかなり良い数値を得ているが、コンパウンドは決して良い数値ではない。男子が多く、女子が少ない。オリンピック種目の正式認可を目指すWAはIOCとともにコンパウンドの女子参加を優先事項として捉えている。

WAのトム・デイレイン事務局長によると、アジアは現在、コンパウンドのトップ女子選手を育てることで主導的立場に立っていると語る。

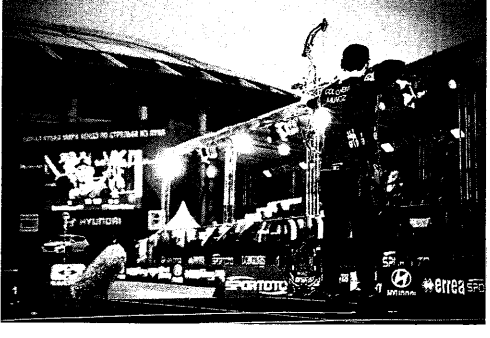
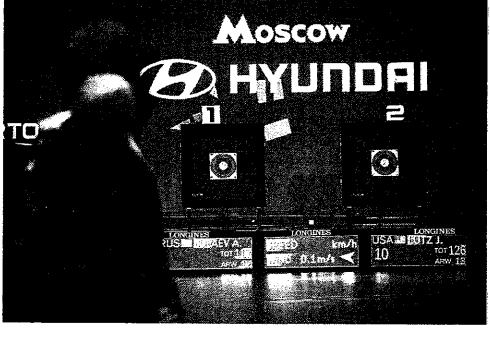
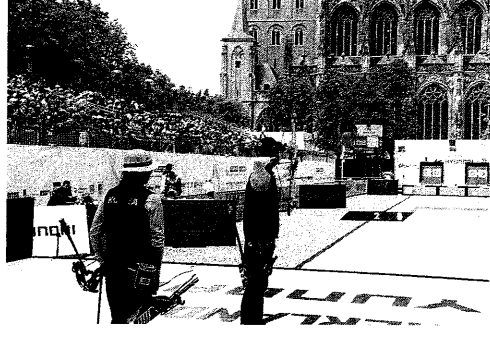
もうひとつ心配なことは、コンパウンドがオリンピックのリカーブに与える影響だ。なかには、オリンピックにコンパウンドが認可されると、リカーブが犠牲になるのではないかと懸念する声もある(主にリカーブアーチャー)。

もちろん、それは間違いであり、心配しすぎ、考えすぎだ。トム・デイレインWA事務局長は、「これは、メダル獲得の種目をリカーブからコンパウンドに変えるのではなく、コンパウンドのメダルを追加するということだ。良い例がバレーボールである。オリンピックには、屋内バレーボールとビーチバレーのふたつのバレーボールがあるが、それと同じように我々もオリンピックで、リカーブとコンパウンドのふたつの競技を実施したい。それは現在の試合形式でも、もしも別形式、あるいは別の形式になるかもしれない。ただ、それは時間だけが知っている」

では、新しいコンパウンドラウンドは、オリンピックに受け入れられるためにどのような試合形式になるか。デイレイン事務局長によると、いまいくつかの候補があるという。

「ひとつは現在の試合形式だが、距離は50mではなく60mにする。もうひとつは、インドアのオリンピックラウンド。そして、3つ目は、フィールドコースで行われるものだ」

繰り返すが、コンパウンドラウンドの最終決定はWAに委ねられているわけではない。最終決定はIOCが行う。デイレイン事務局長は、次のように



[上から1枚目と2枚目] 2019年世界選手権大会。
[上から3枚目と4枚目] 2019年ワールドカップファイナル。
[上から5枚目] 2016年リオデジャネイロ・パラリンピック。



2028年ロサンゼルス・オリンピック